

語り手 大原寿美子さん
(明治40年生まれ)

昭和60年8月15日収録

あらすじ

昔、お父さんとお母さんに子供がなく、願かけをした。三七、二十一日の祈願をしたら、中指の腹が大きゆうなり、そこを割ったら子供が出てきた。まま食え、とど食えで1年、2年、3年、5年とたつて「二十にもなつても同じ五分じゃが、なに一つ頼もつもない」て言った。

五分次郎

(八頭郡智頭町波多)



イラスト・福本隆男

島根に類話「カタツムリの息子」

「鯛売りはどこにおるじやろう」
 「ここにおります」。
 見ると五分ぐらいな人間が鯛を縦に負つて、鯛ばつかり歩きよるよつな。な声が出るから、そつ言つたら、女中さんがかごを持って買ひに出てみるんは、わしや持つとるけおいた。と、何にもおりやあせん。え泊めてくれ」と言つた。夜が明けると、五分次郎は大変に悲しげにすすり泣く。「どげしたじやえ」と言われると、「わたしやあ、ほかのみなあよう食べんに、わたしの食べるもんをお嬢さんが食べてしもうて、今朝はさい」と旅に出させた。途中、五分次郎は海に落ちて鯛に食われたり、鬼の出る宿に泊まったり、奥に入つて見たが、鬼が忘れた打ち見るとお嬢さんの口のほとりに粉がついている。「粉でもひいて返す」と、

「どうしたらいいか」「わたしやあ、粉もお金も何にもいらんけど、お嬢さんをお嫁さんにほしい」とお母さんは困つていたが、お嬢さんが「一寸法師・鬼征伐型」親かたがない。わたしやあ取つて食べたあ思わんけど、口についとりやあしかたがない。お嫁になつて行く」と言つた。それからお嫁になつて行つていたところ、五分

次郎は馬に食われたりしながらも無事に戻つてきな。お父さんとお母さんは大喜びで、次郎と嫁さんにおまえらは四国の金比羅さんに参つてきん旅に出させた。

途中、五分次郎は海に落ちた鯛に食われたり、鬼の出る宿に泊まったり、奥に入つて見たが、鬼が忘れた打ち見るとお嬢さんの口のほとりに粉がついている。と、

解説

なかなかスケールの大きい話である。関敬吾曰く「本昔話大成」によれば、本格昔話の「誕生」の中には「田螺息子」とか「一寸法師・鬼征伐型」親かたがない。わたしやあ取つて食べたあ思わんけど、口についとりやあしかたがない。お嫁になつて行く」と言つた。それからお嫁になつて行つていたところ、五分

（元鳥取短期大学教授）
 （水曜日に掲載）